



良い農地をつくろう

西田 純一

みなさんご存知、北海道の屋根大雪山国立公園。その然別湖外輪山ヌプカウヌプリ麓は、畑の表土が浅い火山砂礫のため水はけが大変良好。そこで、1938年人間社会の仲間入りをさせて戴き、15歳から農業専従で50回目の作物を育てております。

成人の年から現在地で土づくり第一の農業を続けて、孫は男5人・女4人になりました。

先住民族さんがトマム（水が多く湧き出る所。水の多く集まる所。湿地。赤色の水）と名付け、地域内から五条も小川が流水するほか、山麓からの河川が三条通過しています。

音更は、“おとふけ”と発音しますが、先住民族語の「毛髪が生える」に似て、中小河川がたくさん流れ出ているさまを表しています。お隣に初めて挨拶に伺ったとき、「ここは土の中すぐ粘土だから水が豊富で、年中長靴で仕事をする所、西田さんの所は大丈夫だけど」と聞かされました。湿地との出会いです。

父は若い時代に湿地の経験があり、雪の中に見える植生で選んだ安い所（瘠せ畑）、「地力は自分で作れるが、水と石は手に負えない」と、借金しないで始められる土地を探したものです。父の遺訓に反して北のお隣に保証を頼まれ、湿地の多い土地を農地取得資金を借りて引き受け、西隣り町有地と南のお隣りの土地も引き受けて、石礫の多い湿地が増えました。

丁度その頃、第二次構造改善事業が当地でも実施され、規模拡大の最中で耕地造成は当然義務のように12ha余の開畑事業をする事になりました。湿地の実態を見聞して十年余り、海底が隆起して今も変化し続けている十勝平野の成因をはじめ、諸現象を観察検討して排水工法に確信を得ていたもので、高地水源

からの伏流水に途中の砂礫地帯の降水浸透も加わり、これが無数の“地下川”を形成している水循環の一行程が、地下の変化により浮上湧浸出して湿地が出現したことで、伏流水のバイパスを施工する以外に乾畑化は不可能なことの説明を私は繰り返しました。しかし、行政の「常識と慣行」は、現場農家が経験した失敗例、莫大な損失等を正視せず、理解しようとはしないものです。学歴も無い農家の“あんちゃん”が何をほざくかと、結局、従来の普通暗渠排水（14m間隔、深さ1m前後に素焼土管敷設麦稈被覆埋戻す）を強行。根菜類栽培可能な畑どころでなく、一反（10a）の畑も完成せず、むしろ降雨等の浸透が悪化する高水分土壌をこねまわす結果になりました。多額の国費と自己負担金を、文字通り、どぶに捨てることに少しの反省も再検討もなく、彼らは後輩に「机上の常識と慣行」を教えています。

道営畑地帯総合土地改良事業が、多くの改善を加えて、担い手育成畑地帯総合整備事業になり、事業計画に際し、地域農家が新しい効果絶対の大型暗渠（深さ4mに20～40cmの大径有孔管を敷設、玉石を1m以上入れて予備流水域を確保し、百年単位の豪雨に備え、掘削の逆順に低水分埋戻し透水性向上を計る。もちろん、表土は最初に両端に列堆積し、下層土壌等混入なく最終整地に均平填圧。路線は地帯の地形により最善のルートを設定する）排水の施工を強く希望し、大変時間を要しましたが採択され、今年度で延長約60kmが竣工となります。この事業を実施するため、誘致期成会設立（1982年）以来5年の歳月を費やし、幹線800m、支線700余mを自力で施工して工法と効果を立証したのを、農家のみなさんは良く見ていて下さいましたし、道庁幹部の方々も良く理解し、現地を確認して下さいました。

地球表面の七分の一しか無い陸地に、農耕可能帯に農地化できる土地は実に有限です。貴重な自然環境を変えて作る農地は、水と石を最大限活用した上で、除かざるを得ぬ分を排出させて戴き、本当の土づくりを進めて、全農地を“本物が作れる良いもの”にしたい。これが私のライフワーク、人生そのものです。

（北海道河東郡・農業）